



薬学部

特任教授 **今井 輝子**さん (病態薬効解析学)

Imai Teruko

## ●プロフィール

- 1982年 熊本大学大学院薬学研究科修士課程修了後、同製剤学教室研究生になる。
- 1985年 同製剤学教室教務職員 (~1999)
- 1993年 東京大学薬学部研究員 (動態学・6ヶ月間)
- 1998年 アメリカ合衆国カンザス州立大学研究員短期留学
- 1999年 熊本大学薬学部特任教授

黙って見守ってくれた上司に感謝しています。

### 人がしないような研究を

薬の体内動態とは、体内に取り込まれた薬が目的の臓器に到達して薬効を発揮して、体外へと排出されるまでの吸収・分布・代謝・排泄の4過程を指しますが、この体内動態が原因で、薬としての開発を断念せざるを得ないものが数多くあります。今井さんはこのうちの代謝に目を付けます。代謝が原因となって予測できない体内動態や副作用を示すことがあり「理論的に酵素の特徴を調べていくことにより、もっと良い薬が出来ないか」と考え、プロドラッグ (代謝によってはじめて薬効が現れるように工夫された薬) の研究をされています。

今井さんが研究対象にしている代謝酵素 (エステラーゼ) は、それほど多くの人が目につけない酵素なので、研究者は少なく、決して派手ではない研究だとおっしゃいますが、「テーマを変えることなくずっと続けてきたことで今につながりました。上司をはじめとして、環境には、本当に恵まれました」と。学会などでも、最近では「人がしないような研究を、よくやったね」と言われることがあるそうです。全ては、今井さんが学生時代からお世話になった先生方の態度によるところが大きいそうです。「自分でもそうとは知らず、当時の教授・助教授の研究に対する態度から、ひとつのテーマを多方面からじっくり見つめて研究していくことを学びました」。

### 薬の合成から製剤へ

大学4年生の時、ちょうど修士課程の願書を出す時期に、今井さんは突然片方の目が見えなくなります。原因はわかりませんでした。薬で回復しました。しかしながら大学院を断念し、薬剤師の資格を取り、一年間病院の薬剤師として働きますが性に合わず、「研究者になりたい」という夢を叶えるべく、熊本大学薬学研究科修士課程に進学します。

学部時代は薬の合成を学びましたが、大学院では製剤の方に入りました。合成と製剤とでは、使用する器具から異なるため、「何も知らなかった」とおっしゃいます。学部時代から製剤の勉強をしてきた周りの院生たちに聞いて教えてもらいながら「一所懸命勉強しました」。

### 一生と一緒に答えはひとつじゃない

今、学生たちと接していて気に掛かるのは『答え』をすぐに知りたがること。「答えはひとつじゃない」と応えると「じゃあ、どれが一番いい答えなんですか」とくる。「人生と一緒に、答えはひとつじゃないんだけどなあ」と、今井さん。

「好きなことを見つけたら、継続してやっていきなさい」ということ、また、「自分で自分の評価を決めないで」。何かがうまく出来ないと、すぐに自分にレッテルをつけてさっさと諦めてしまう若者たち。「評価なんて、他人が判断してくれることなんだから、自分からレッテルを貼らないで」。すぐに答えを出さなくてもいいのだから、自分の目の前のことにじっくり気長に向き合って欲しい、と。

朝と夜はどんなに仕事で遅くなっても愛犬との散歩は欠かさない。忙しい研究生生活を愛犬が癒してくれる。



現研究室メンバー。2008年4月天草にて。